

自閉症児における携帯電話を利用した移動スキルの指導（1）

大久保賢一¹⁾ 福永 顕¹⁾ 井上雅彦²⁾

1) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 2) 兵庫教育大学附属発達心理臨床研究センター

Key Words: 携帯電話, セルフコントロール, 課題分析

【問題と目的】

本研究では、自閉症児が携帯電話を用いて保護者に自分の現在地を報告するスキル（報告行動）と、保護者が要求した場所に自閉症児が正確に移動できるスキル（移動行動）の指導プログラムの開発を目的とする。報告（1）では、対象児が口答で応対者に報告する、及び応対者の要求した場所に移動する指導とその効果について検討することを目的とする。

【方法】

対象児：対象児は、中学校障害児学級に在籍する14歳の自閉症男児（CARS：38.5 重度自閉症）であった。WISC-VIQ46, PIQ54, FIQ44で、12歳から大学で簡単な質問応答、教科学習、余暇活動などの指導を受けていた。

外出先のアセスメント：対象児は毎月1回動物園に行くというこだわりがあり、母親は動物園で対象児がどこにいるのか把握するのが大変であるとの報告から、本研究ではA動物園で実際に携帯電話を活用できるためのプログラムを実施した。

報告訓練1：応対者が「いま、どこにいますか？」と尋ねながら動物写真カード（インド象・オウム・フラミンゴ）を対象児に呈示し、対象児が呈示された写真カードを手掛かりに「のところにいます」と報告できた場合、言語賞賛を行った。誤反応の場合はプロンプトを加え修正した後、再試行を行った。応答者及びプロンプターは大学スタッフ1名が担当した。

報告訓練2：課題分析表（Table1）を使って、大学で指導を行った。対象児が応対者から質問を聞いた後に答えたら言語賞賛を行った。誤反応の場合はプロンプトを与えて修正を加えた。写真カードは報告訓練1と同じものを用いて、テスト条件では命名は可能であるが、報告訓練の連鎖には組み込んでいない未訓練刺激（ダチョウ・コツメカワウソ・クマなど）の12種類を用いた。テスト場面では、対象児に正誤のフィードバックを与えず、また対象児が誤反応を示したら即中止した。

Table 1 報告訓練2で用いた課題分析表

行動連鎖表	プロンプト
「もしもし、名前です」 (もしもし先生ですけど、今どこにいますか)	せりふカード指さし
「 のところにいます」 (はい、分かりました)	写真指さし

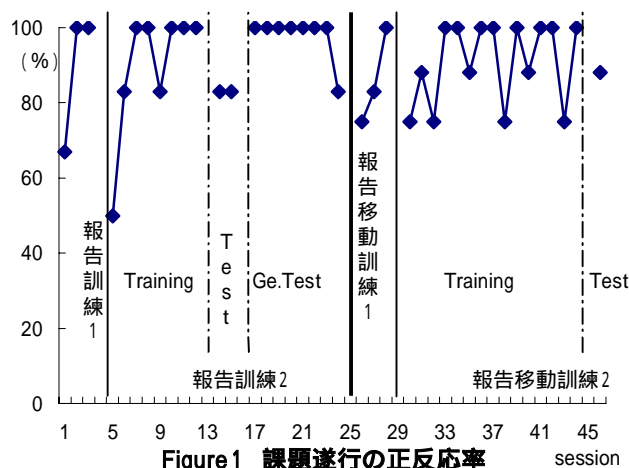
Table 2 報告移動訓練1で用いた課題分析表

行動連鎖表	プロンプト
(もしもし先生ですけど、今どこにいますか?)	
「 のところにいます」 (分かりました。では、目的地のところまで来てね)	写真指さし
「はい、分かりました」 目的地へ移動する	せりふカード呈示 「どこへ行くのだった？」

報告移動訓練1：課題分析表（Table2）を使って指導を行った。応答者及びプロンプターは大学スタッフが各1名ずつ担当した。写真カード3枚（インド象・オウム・フラミンゴ）を訓練室の壁に貼り、床にそれぞれ1枚ずつマットを敷いた。応答者が移動を要求した動物の写真カードが貼ってあるマットの上へ対象児が移動したとき、言語賞賛を行った。誤反応の場合はプロンプトを与えて修正を加えた。

報告移動訓練2：従来の訓練刺激（インド象・オウム・フラミンゴ）にキリン・リスザル・シマウマの3種類を加えて指導を行った。写真カードは、訓練室の正面の壁に3枚、後方に3枚貼り、対象児は応対者の移動要求に従って移動したとき、言語賞賛を行った。訓練はTable2の課題分析表をもとに指導を行った。テストは、報告訓練2と同じ手続きで実施した。

【結果と考察】



指導の結果をFigure1に示した。報告訓練1,2によって、写真カードを手掛かりに自分がどこにいるか報告することが可能になり、未訓練刺激の写真カードを呈示した般化テストでも同様の結果を示した。報告移動訓練では当初、行動連鎖表（「はい、わかりました」）の正反応率が0%であった。誤反応の例として応対者が移動を要求している途中で「はい、わかりました」と言うエラーと何も言わずに目的地へ移動するというエラーであった。そのため誤反応の場合にはプロンプターがプロンプト表に従い、即時修正を行った。その結果、課題全体の正反応率が100%近くまで上昇し、テスト条件でも88%の正反応率を示した。応対者からの移動要求に対して対象児は全試行数で100%の正反応率を示すことが可能であった。このように課題分析表を用いてトレーナーの指示を統一する支援方法は、対象児の指導に有効であった。今後は携帯電話を使用して応対者とコミュニケーションが取れるかどうか、また実際に動物園に行き遠距離の移動が可能かどうか検討していく必要がある。

(FUKUNAGA Akira, OHKUBO Kenichi, INOUE Masahiko)